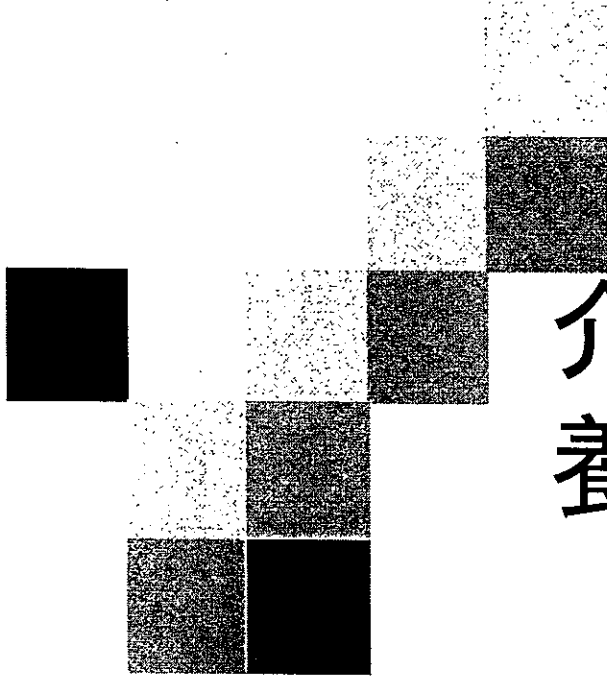


「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会」平成18年5月15日 資料Ⅱ
(認知症介護研究・研修東京センターユニットケア推進室
荻野研修主幹提出資料)



介護現場から介護福祉士の 養成に望むこと

2006年5月15日

認知症介護研究・研修東京センター

ユニットケア推進室

荻野 雅宏




卒業生として介護福祉士養成校を振り返って



養成校の概要

- 定員35名（入学時は38名）。ビジネスコースも併設された2年目の福祉専門学校。
- 高校を卒業してすぐの生徒（18歳）と、社会人経験者（20歳代が大半）とがほぼ半数。
- 就職率は98%高齢者福祉施設が多い。
- 校長1名。常勤2名（1名は介護福祉士、5年間の現場経験と300時間の研修受講者。1名は看護師）学年毎の担任制であったが、講義などは担当に関係なく行っていた。



学生について

- 入学時は自らが介護を進路として選んでいない
⇒ 学習よりも生活指導
- 資格の取得により福祉関係への就職の意思は高まる
⇒ 他分野の学生とは異なる
- 流されやすい若者の気質
⇒ ボランティア施設見学時の感想

施設介護実習について

- 第一段階 2週間 施設の概要を知る 夜勤なし
- 第二段階 4週間 職員の動きを知る 夜勤あり
- 第三段階 4週間 介護計画を立てる(受け持ちの利用者を決定し、介護計画を作成。1週目情報収集、2週目計画立案、3週目修正など)
- 常勤教員による巡回指導あり
- 毎日実習記録を記入(A4表裏1枚。施設担当職員によるコメントあり)
- 実習では主に施設担当職員とともに業務をこなす

養成校で学んだことと学べなかったこと

■ 現場で有効であったこと

障害の理解、コミュニケーション方法(丁寧な言葉遣い、目線を揃えるなどの基本)、移乗介助、車椅子の操作、おむつ交換、レクリエーションなど

■ 就職してから学んだこと

個別ケアの理解、看護の初歩的な知識、認知症のケア、日本の文化やしきたり、家事、座位の確保の重要性、残存能力を活かしたりハビリ、個別浴槽の入り方



介護現場が求める人材について

特別養護老人ホームの介護主任として



介護職員の採用について

- 慢性的な人手不足
- 採用の基準はヘルパー2級以上
- ボランティアからスカウト(ヘルパー2級を勧める)
- 対人サービスへの適性
- 「現場経験者」よりも普通の感性をもった「新卒」の有資格者



介護に必要な適性について


1. 生活や対象者の尊厳に対する豊かな感性

⇒面接時の質問

「隣の方が食べているのをみて、私の食べ物がないんですけど、と言われたらどうします？」

「食事中に突然目の前のおばあちゃんが洋服を脱ぎ出したらどうします？」

「今行ったばかりだから、とトイレに行くのを拒否されたらどうします？」



2. サポーターとしての介護

⇒お世話してあげる、やってあげるでなく、残存能力の活用や自立支援の利用者主体のセンス

3. 介護職として働く意思

⇒介護を仕事とすることについて、養成校での2年間の学生生活は、十分に考えるためには意味がある。

しかし、介護福祉士資格の質を確保するためには、卒業時に国家試験を義務付ける必要があるのではないか。